

[連載] 第46回

清々しき人々 月尾嘉男

(東京大学名誉教授・工学博士)

旅行を大衆に開放した T・クック



Thomas Cook (1808-92)

蒸気鉄道と禁酒運動

新型コロナウイルスの蔓延により、現在、旅行は急減していますが、政府の様々な支援政策が実施されると旅行者数が急増するようになり、旅行は人間の根強い欲求です。世界全体の国際観光客数は過去七〇年間で約四五倍に増加しています。さらなる特徴は団体旅行が相当な比率になっていることです。最近では旅慣れた人々が増加し、団体旅行は低下の傾向ですが、それでも日本出発の海外旅行の約二五％は団体旅行です。この団体旅行は一九世紀中頃のイギリスに登場しましたが、それは二種の社会動向の複合結果でした。第一は蒸気鉄道の普及です。一九世紀初頭にイギリスで蒸気鉄道が発明されましたが、イギリスの技術G・スティーブソンが指揮し、一八二五年にイギリス中部のストックトンとタリーントンの四〇キロメートルの区間に実現したのが世界最初とされ、さらに三〇年にはリバプールとマンチェスターの五六キロメートルの路線が実現しました。それ以後、イギリスでは鉄道建設が急増し、二〇年後の一八五〇年には全国の鉄道路線が一萬キロメートルにもなりました(図2)。もう一種の社会動向は禁酒運動です。一九一九年から

鉄道と禁酒を一体とした旅行

三三年まで法律によって酒類の製造・販売・飲用を禁止したアメリカの禁酒運動が有名ですが、イギリスでは一九世紀中頃から急進派知識人と労働階級が一体となって選挙制度改革を目指したチャーティズム運動の一環として禁酒運動が活発になりました。この鉄道と禁酒という一見すると関係のなさそうな現象を一体としたのが今回紹介するT・クックです。イギリス東部の地方都市レスターで印刷や出版を家業としていたクックは教会の熱心な信者で、職場での飲酒に反対するプロテストメント書の当時の習慣を疑問とし、自身の工場では、禁酒運動を推進するとともに、禁酒運動を推進する人々を自宅に宿泊せしめたり、禁酒に関係する雑誌を発行したりしました。そのような時期の一八四〇年にレスターにも鉄道が敷設されました。そこで翌年にクックが着想したのが、一五キロメートルほどの北側にあるラフバラで開かれる禁酒運動大会に参加出来る人々を新設された鉄道で輸送しようという計画です。早速、鉄道会社と、多額の乗客を保証するから臨時列車を立立て、通常の料金の半額で輸送してほしいという交渉をし、世界最初の鉄道による団体旅行を計画したところ大変な人気になりました。それ以後、飲酒の代替となる健全な娯楽として日帰りの鉄道による団体旅行を何度も実施して成功させますが、一八四五年に約一五〇キロメートルの遠方にあるリバプールまでの団体旅行を企画します。多数の鉄道会社が乱立していた時代であり、この旅行のために四社で鉄道路線を利用する必要があり、複

雑な移動でしたが、クックが交渉して直通列車を立立て、しかも名所を観光できるオプショにも用意し、これも大変な人気になりました。さらに旅行の対象になったのがスコットランドでした。W・スコットのスコットランドを舞台とする小説が流行し、人々は旅行を熱望しますが、多額の費用が必要で庶民には無理でした。そこでクックはスコットランドまで鉄道が開通した翌年の一八四七年に一部は海上を移動する団体旅行を企画したところ、参加する人々も、三三〇人が加わるとともに、到着したグラスゴーやエジンバラでは盛大に歓迎される成功となりました。

第一回万国博覧会の威力

このような時期に団体旅行を後押しする格好の行事が出現しました。一八五一年に開催された第1回万国博覧会です。当時の第1回万国博覧会です。当時、絶頂にあった大英帝国の威信を世界に披露するため、温室の建設技術J・バクスターが設計した天井も壁面もガラスで出来たクリスタルパレスを会場とし、産業革命の最先進国であるイギリスの機械装置や芸術作品を展示して国力を世界に誇示することを目指した企画です(図3)。この博覧会最初の行事は五ヶ月間の会期に七〇万人の観客が到来するほどの成功でしたが、当時、ミッドランド鉄道は重役を兼務していたクックは団体旅行を企画し、雑誌「エクスカーション」まで創刊して宣伝した結果、故郷のミッドランド地方から一六万人以上の観客を博覧会場に誘致することに成功しました。しかも博覧会場は禁酒・禁煙であり、クックにとっては多数の人々を案内するに格好の催事でした。クックは旅行事業で着々と成功していきませんが、禁酒運動にも相変わらず熱心で、翌年にはレスターの郡心に壮麗な禁酒会館を建設し、隣接する場所に「クックの商業・家族ホテル」という名前の禁酒ホテルまで建設します。以後も国内の団体旅行を次々と企画しますが、一八五三年にアイルランドのダブリンで大産業博覧会が開催されたことを契機に国外の旅行に退出、多数の人々をアイルランドの名所に案内する団体旅行を実施します。

海外旅行への発展

翌年、母親の死を契機に、印刷と出版の業を廃業して旅行営業を本業とすることにし、いよいよ大陸に進出することになります。その契機となったのが一八五五年にパリで開催された第二回万国博覧会でした(図4)。クック自身が添乗して

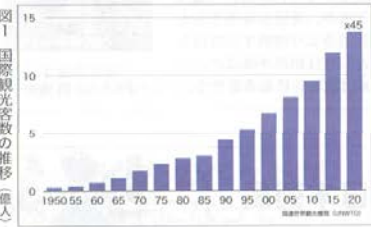


図1 国際観光客数の推移(億人)



図2 イギリスの鉄道路線(1825-62)

月尾嘉男の本



世界各地の先住民族を訪ね歩いた著者が、世界の文化の中に人類の歩むべき叢智を探る。

『清々しき人々』第2弾、2021年発売予定!



自分のためだけでなく、人々のためにも高い理想と目標をもって生きた歴史に残る人々、23人の紹介と

遊行者社 〒160-0008 東京都新宿区四谷三栄町 5-5-1F TEL 03-5361-3255

ラウンド・ミッドナイト 風の言葉

Round Midnight by Kenji Maruyama

エッセイでも小説でも、詩でもアフォリズムでもない。あえて言えば、丸山健二版「聖書」!



仮フランス装・丸装 定価: 2600円+税

田畑書店 〒102-0074 東京都千代田区九段南3-2-2森ビル5階 TEL 03-6272-5718 FAX 03-2960-0160 www.tanabataken.com

朝倉書店 シリーズ完結!

ネイティブ英文法(全5巻) ネイティブの英語感覚を身に付ける!

4. 英文の基本構造 11月新刊 本田謙介・田中江扶・島山健二 著 A5判 212頁 定価(本体3,300円+税) (51674-6)

11月新刊 5. 構文間の交替現象 岸本秀樹・岡田直之 著 A5判 200頁 定価(本体3,200円+税) (51675-3)

〒162-8707 新宿区新小川町6-29 TEL 03-3260-7631 FAX 03-3260-0160 http://www.asakura.co.jp

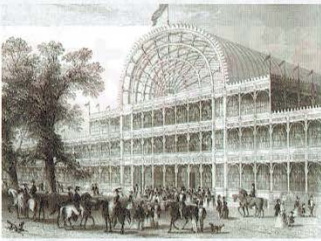


図3 クリスタルパレス

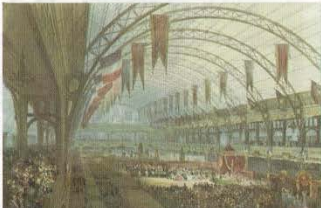


図4 第2回万国博覧会(パリ)



図5 世界旅行と中東旅行の宣伝



図6 開通直後のスエズ運河

二五名が参加する団体旅行を実施したところ人気があったため、帰国後に再度、五〇名の団体旅行を実施します。旅行は成功しました。取組は赤字であったため、しばらく大陸旅行は中止しました。

その期間、夜行列車による国内旅行などを企画しました。一八六一年から海外旅行を再開します。同年、パリで労働者の祭典が開催され、それに参加する人々が安価に旅行できるように手配し、イギリスからの参加者数の半数をクックが世話する結果になるほど成功しました。そこで拠点を地方都市レスタークから首都ロンドンに移転しました。鉄道会社が自身で旅行業務に進出しはじめたこともあり、海外旅行を中心とする方向に転換します。

### 大衆に開放された海外旅行

その一歩として一八六三年にクックはスイスを訪問し、鉄道会社や宿泊施設関係の人々に相談したところ歓迎され、スイス旅行を実施します。計画を発表すると五〇〇人も応募があり、二班による一八日間の旅行が実現しました。このスイス旅行の成功に後押しされ、今度はイタリア旅行を企画します。事前に

クック自身がイタリアの各地を調査し、六四年のローマとナポリを中心とする旅行も大変な人気で定員を大幅に上回る応募がありました。

これらの団体旅行には、すでに現在と同様の特徴が登場していました。まず鉄道運賃や宿泊料金の大幅な割引により国内旅行よりも安価なこと、そして時間に余裕のある女性の参加が多数であったこと、さらに観光の時間を確保するため食事の時間が圧縮され、とにかく多数の名所旧跡などを巡回することです。それまで観光旅行は貴族や上層階級の特権のようでしたが、一気に大衆が流入してきたことにより、観光公害も出現し批判がありました。

この最後の批判にクックは敢然と反論しています。観光は上流階級の特権ではなく、人類の進歩の手段であるうえ、見知らぬ人々が旅行で友人となるなどの効用もあり、観光への排他的価値観は進歩の時代に逆行するといふ意見を發表しています。この意見の背景には、ウィクトリア時代という大英帝国が最大に繁栄した時代の影響もあり、労働階級の賃金が上昇し、法律による休日も増加、その資金と時間の余裕が旅行へと噴出したのです。

それ以後、一八六九年一月にスエズ運河が開通すると、その祝賀式典に参加する団体旅行を企画(図6)、八〇年代にサイクリングが流行すると、そのための団体旅行を企画するなど、世界の動向を反映した活動をします。さらに従来は大衆を

### 世界に拡大した団体旅行

九四五年間のアメリカの南北戦争が一八六五年四月に終結すると、さらなる団体旅行の目標はアメリカ大陸になりました。言葉の問題も無いアメリカはイギリスにとって便利な場所でした。そこで六五年一月に下調べのため渡米して鉄道会社などと契約して帰国し、翌年四月に約六〇日のアメリカ団体旅行が息子のジョン・メイソン・デュエーロに到着し、アメリカ東部の主要都市を見学して無事帰国しました。

しかし、アメリカの鉄道会社は団体割引に十分な対応をしてくれなかったため、約七年間はアメリカ旅行を企画せず、中東を新規開拓します。熱心なキリスト教徒のクックは聖書に登場する土地が多数存在するパレスチナに関心があり、一八六八年に予備調査をして、翌年にエジプトとパレスチナの旅行を企画します。しかしホテルもない状態のため、六〇人余の旅客のため、多数のテントや移動するためのウマを用意する大変な旅行でした(図5)。

禁酒運動を普及する目的でクック個人が開始した個人企業が世界最大の旅行会社に発展したのは、ローマ帝国やモンゴ帝国以来の世界帝国である大英帝国が出現した時期に、鉄道や汽船など移動手段の革命が同期して発生したうえ、産業革命が成熟して労働階級に時間と金銭の余裕が生まれたという、いくつかの要因が重複した時期に敏感に反応した旅行を次々に企画したクックの能力の成果であることは確実です。

### 通信時代がもたらした破綻

対象とした団体旅行が中心でしたが、有名になるとともにインドの王侯の王子の旅行を手配するなど、著名人々々の個人旅行の手配も依頼されるようになって、世界規模の旅行会社として発展していきます。

歴史のある世界最古の旅行会社は消滅し、現在、オンライン旅行会社としての再生が進行しています。



つぎお よしお  
1942年生まれ、名古屋生まれ。工学博士。名古屋大学卒業。1965年、東京大学工学部卒業。東京大学教授を経て東京大学名誉教授。2002、03年総務省総務審議官。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリースキーをしながら、知床半島、羊蹄山麓、釧路湿原、白馬山麓、宮川清流、瀬戸内海などを主宰し、地域計画の取組とともに環境保護や地域活性化に取り組む。主要著書に『日本百年の転換戦略』(講談社)、『縮小文明の展望』(講談社)、『地球の救い方』(水声社)、『遊行者』、『100年先を読む』(モラロジー研究所)、『先住民民族の救済』(遊行者)、『誰も言わなかった本当は怖いビッグデータとサイバー戦争のカラクリ』(アスキー)、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』(致知出版社)、『幸福実感社会への転換』(モラロジー研究所)、『転換日本 地域創生の展望』(東京大学出版会)など。最新刊は『清々しき人々』(遊行者)。

### 編集後記

新型コロナウイルス感染情報で翻弄され、日々大切な忘れ物をしているのではないだろうか？ そのことに気付かせてくれたのが、訪ねてきた通信社の知人だった。三浦さんは当時通信社の福島支局にいて、東日本大震災原発事故で避難を余儀なくされ、不自由な中でも懸命に生きている人々の日々を追っていた。福島県南相馬市鹿島に大規模な仮設が出来てからは仮設に通い詰めて誠実に伝えていたのだ。そこで出会ったのが、後に仮設の詩人と言われる藤島昌治さんだ。藤島さんは南相馬市小高区で被災し、新潟三条の避難所を経て鹿島の四畳半、一間仮設暮らしをしていた。当時仮設の自治会長を引き受けた藤島さんは、みんなが少しでも

癒されるように仮設にヤギを飼い、畑を作り、花々を植え、四季折々の祭りをを行い、全国からボランティアを積極的に受け入れ、被災者との交流の場を作った。そして現地を見せることで、原発事故で失ってしまったものの大きさを全国の人々にも伝え続けたのだ。その人はいつも笑顔。その顔からは笑い顔が消えることがなかった。しかし、一人四畳半で作る詩はあまりに悲惨なものだった。そのギャップは三浦さんを捉え、仮設を語れるたびにいつか藤島さんを書いてみたいという気持ちにさせていた。そして震災10年目の企画取材がスタートした。しかし、そこには藤島さんの姿はない。昨年病に倒れ、3か月後、12月12日帰らぬ

人となった。仮設を出て自由な生活が始まった矢先の出来事だった。そう、藤島さんが逝ってから1年になる。三浦さんの取材は始まったばかりだが、果たしてどこまで藤島さんの人物像に迫ることができるのか。仮設暮らしの中で藤島さんに喜びがあったとすれば、仮設の人々が少しでも笑顔になれるよう、働いた瞬間、年老いた人が藤島さんをもっと頼りにしてくれたことだったのではないだろうか。仮設を出て周囲に知る人のいない寂しい田舎暮らしの慰めは、生きる希望はなんでもあったのか。死の床で毎日詩を書いては送ってくれた詩人の笑い顔が浮かぶ。南相馬の藤島さんは、生きていたのだと思う。(H)

12月号 令和2年12月7日発行  
● 編集 モルゲン編集部  
● 発行 (株)遊行者 ● 印刷 北日本印刷(株)  
TEL 160-0008 東京都新宿区四谷三栄町5-5-1F  
TEL 03-5361-3255 FAX 03-5361-1155  
HP <http://yugyosha.web.fc2.com/>  
MAIL [morgen@vesta.ocn.ne.jp](mailto:morgen@vesta.ocn.ne.jp)  
● 配布エリア  
・高等学校(全国)  
・中学校(北海道/岩手/宮城/福島/群馬/栃木/茨城/埼玉/東京/千葉/神奈川/長野/新潟/山梨/富山/石川/福井/岡山/広島/香川/愛媛/高知/佐賀/長崎/大分/熊本/沖縄)  
・朝の読書実施校(全国中・高等学校)  
・大学・短大・専門学校・サポート校、  
公共図書館の一部  
● 月刊紙(毎月1回発行 ※7・8月は合併号)  
● 定価 年間購読料3,300円(300円×11回)  
※一部発行500円(価格はすべて税別)